Seasonal Opinions on Visual Facts

石佛群を抱く枯山水の平原 須田国太郎の見た雲崗石窟寺院

稲賀 繁美

著者 堆積による黄土成層についても、 (『支那の経済と社会』 『東洋的専制主義』の著者ウィットフォーゲル) おりおりの猛烈な勢いで荒れくるっている風についても、 要するに、自然的要素については、ささやかな関心さえ示していません。」 そのせいで風化してしまった草原についても、 は、そこ (戯曲 「誰が一番馬鹿だ?」) ではまだアジアの奥地 あるいはまた、

花田清輝「草原について」(一九六五)(『東洋的回帰』文藝春秋、

月に 歴史のなかにこの作品を据えなおし、 田平八郎らと北京西方の雲崗にも足を伸ばし、第十九洞ほかの石窟仏像 めて訊ねたい。 の素描を試みる。 年譜によれば須田国太郎は「大東亜戦争」 「満洲國美術展覧会」の審査員となり、 そのなかに 《雲崗水無河》 その意味を須田の画業のなかに改 勃発の翌年、 が含まれる。 大陸に渡る。 一九四二年七 雲崗をめぐる この機会に福

須田国太郎のみた雲崗石窟寺院」

91-92頁

52-54頁

その多くは失われた、 として中央美術社から刊行された。ただしその直後に関東大震災により の石佛を訪ねる機会を得る。その滞在記録は二人の共著『雲崗石佛寺』 その任務の末期にあたる大正九 (一九二〇) 年、 で教授を務めるとともに奉天医院の皮膚科部長を兼務していた杢太郎は (一八八五 — 一九四五)。奉天(現、瀋陽) 医学博士、太田正雄といえば木下杢太郎の名で知られた詩人・文筆家 という。 一八年後の昭和一三 (一九三八) 年、 の満鉄付属地にあった南満医学堂 木村荘八とともに雲崗 杢

「石佛群を抱く枯山水の平原

2019年11月25日

:関西の洋画

太郎は座右宝刊行会から、

同書重版の慫慂を受ける。

旧版から杢太郎の

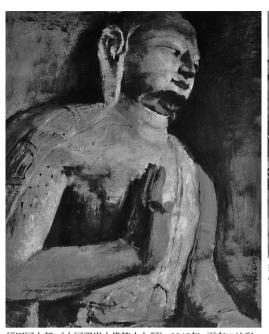
「上がり」の域だと思っていたという。

当時まだ天龍山の石窟は発見されておらず、

龍門・奉先寺の石窟、

大

二〇年ほど前に奈良の博物館で偶然、石井鶴三に出会い、「酒買観音」 彼の幾つかの論考からも、 点からみても完璧な造作を持つ稀有な作例として、 のこと。ちなみに、 は多忙のなかにも新稿 付されており、きわめて入念堅牢な造本である。増補に際して、杢太郎 地写真を掲載して、重版『雲崗石佛寺』が刊行される。 ほか、当時北京に店を構えていた写真師、 日記部分のみを採る単著であり、杢太郎自身による現地でのスケッチの カイック」な彫像に得心がゆくに至ったので、 の評価が話題となった。「酒買」とは戯れの俗称で、 変形四六版の小ぶりな判型だが、写真版のほか六○葉を超える挿絵も 石井はこのすらりとした立像を、近代的な彫塑の観 「大同石佛雑話」を加え、こんな話題を提供する。 そのことは知られよう。 山本明による百葉を超える現 自分の仏像鑑賞は、 高く評価していた。 杢太郎はこの 法隆寺の百済観音



須田国太郎 《大同雲崗大佛第十九洞》 1942年 画布に油彩 65 x 52 cm



《雲崗水無川》 1942年、 画布に油彩 50.0 x 60.0 cm 個人藏

ったという(地名表記は杢太郎にならう)。

の古都に通ずる―。

そのことを悟った折の驚きにも似た、そんな心境だ

それがついにはモスクワからヨオロッパ

そのさらに北方の雪寒の地にトムスク

オムスク、トボルスクがあり、

大都かと思っていた。

ところが、

っている。折から杢太郎は奉天住まいの身で、朔北のハルビンが最後の

の院」だと思っていたのに、

同の雲崗は、

ころが龍門、

雲崗へと足を運んでみると、それまで推古朝の仏像が「奥 なお工科大学の限られた専門家しか訪れていなかった。

ح

さらにその奥にひろびろとした領域が広が

島国 代を遡り、「印度から希臘」にまで伸びてゆく。 策を取るに至っている。 突発し、 的な膨張拡張は、 事業であり、 るだろう。 図を拡大していた時期の、日本人知識人の心境を正直に語ったものといえ 在が内地に知らされ、大きな話題を撒いていた。 急に甚だ広くなるのである」。そして空想の視点は唐や北魏からさらに時 昭 推古佛から出て大同佛に至ると、文化史的回顧のペルスペクチイヴが 和 雲崗をもいちはやく管理下に置き、 六年前には熱河占領とともに、 「日本」が 一三年といえば、 それきっかけに、 アジア内陸への考古学調査は、 植民地争奪戦の前哨戦、学術上の代理戦争ですらあった。 「東洋」へと拡大してゆく。 杢太郎の雲崗行脚にも、まがらかたなく刻まれていた。 前年七月七日に北京郊外の盧溝橋で発砲事件が だがこうした措置も中国人からみれば屈辱にほ 第二次支那事変が勃発、 承徳の避暑山荘や広壮な喇嘛廟の存 九月二〇日には現場の古蹟保護 帝国主義列強が覇を競いあった そうした「東洋意識」の心理 この感想は、 華北に進出した日本軍 日中戦争が本格化す 満洲へと版

時期、

民国側

の雑誌媒体には、

雲崗十九洞の大佛の写真を表紙に選んだ

日本側の占領に続くこの

新たな目玉として大同観光

かならず、

自分たちの遺産喪失に等しかった。

ものがある。北京に本社を置く華北交通が、

佛 佛をほぼ側面から写生した二作品を、 秋 本に定着しにくい黄土の扱いに苦労したとの証言が残る。 たりの競演が話題となる。 に着手したの 掲載。 川端龍子は青龍社展に、《佛接引洞》 この年の院展に前田青邨は畳二畳ほどもある大作 b ح の時期。 ともに墨と黄土とによる着彩だが、 杢太郎 の 雲崗視察の成果として展示し、 右の文章は同年九月の の前面、 および同じ大露 青邨は 『文藝 《大同 S 紙 石 春

だが、 二三頁)。 欧 込んだ柳瀬正夢は、 真機を駆使した長谷川三郎は、 を訪れた川端龍子は、 ターの造作が遙か雲崗にまで伝播していることは、 語っている(「画で立つまで」[1950]『近代絵画とレアリスム』、一九六三年、 n も第十九窟石佛を、午後の光の下、 (五十殿利治「日中戦争期における雲崗石窟と日本人画家」『芸術研究報』筑波大学、 一八~三〇号、二〇〇七~〇九年)。 į ,四半世紀前、 須田国太郎が雲崗を探訪するのはその五年後の一 週間頑張った経験は自分の一生に大きな印象を残している」と後に 大土木工事への夢想を逞しくする。 その画格には、 との折、 河川に沿って露出した岩盤を掘削した石窟群として、アジャン 途中インドでアジャンター遺蹟を訪 須田は第一次大戦終了直後の大正七 (一九一八) 洞穴の周辺に住居する子供たちにレンズを向ける。 仏教遺跡に大東亜の栄光ある将来を仮託する。 他の追従を許さぬものがある。 日本的な規模を超絶した達成を眼前にし これら先行する画家たちと同様、 速筆で描き取る。 その一方、これも写真機を持ち 九四二年夏。 疑いあるまい。 れていた。 ○号ほどの油彩 年に それ 現地 雲崗 須 写 \coprod で 渡 ょ

九

その下流方向。 屈曲したのち石窟群のまえで東に向きを変える。 窟群は武州河の北岸、 だが、 類例を離れて特異なのが 陰翳からして、 砂岩の摩崖に穿たれている。 時刻は午前だろうか。 《雲崗水無河》(一九四二) 須田が目を向けたの 河は西北から流れ 石窟群 だろう。 は 画家の 左 は 石

> 肌に、 下資源》 異郷風物である。 営みは一 背後に位置していたことになる。 作と比べても、 が、 にすれば、およそ画趣などとは無縁な荒野に、 村の佇まいを描写していた。 ようか。 はスペインは より二二年遡る、杢太郎による水彩の Þ 画 ひたすら荒漠たる奥行きのみが投影される。 [布に即興で定着される。 《八幡平》 切なく、 (一九四三)、石井柏亭の 《工業地帯》(一九三六)をさらに突き詰めた地表との鬩ぎあ 《アーヴィラ》(一九二〇)の赤土の城塞の記憶も重 とりわけ人間の卑小さに慄然とさせられる。 の連作 荒涼とした乾燥地帯が広がるばかり。 同様の山肌の連作は、 (一九五四) とはいえ須田の眼が捉えた風物には人間 ほとんど抽象画といって差し支えな 《西部蘇満国境》(一九四三)などの異色 涸 へと継承されよう。 れ河は畑作地帯になっていた。 《雲崗風景》 敗戦後の 画家は対峙する。 が、 清水登之の 鄃 その牧歌的な農 左手の丘陵を別 (室戸)》(一九四 突き詰めた 《南方地 そこに 一ねられ それ

旦)。 質が、 となる。 痛 尊卑が真に絵画の藝術的高下ではない」 絵画國日本の恥辱である」(「大阪毎日」一九四一年四月五日)。 九年一一月号)。 「徒に日本主義を標榜する画家がわが国に存立するなどは からじわりと浸透してくる。 「戦争画が真に戦争の影響から生まれることは、それぞれの戦争の を写すのは、 時局柄、 絵画の上に表明されていなければ意味はない」(「龍大新聞」一九三 真意をつかむのは容易でない行文だが、 国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授 この 《雲崗水無河》 須田が学徒出陣の姿、 を描き留めて、 (「京都新聞」 「黒ずくめ」 一九四 ほぼ一年後のこと 主張は字面の裏 一年一〇月二〇 「主題の高下 の 特

年一月一三日 雲崗を描写した芸術家に焦点を当てた展覧会『アジア・インパクト 日本近代美 「東洋憧憬 が東京都庭園美術館で開催中 (二〇一九年一〇月一二日~二〇